

魯迅「傷逝」の比喩表現について

劉 靚

Abstract

A large number of Lu Xun's literary works have been written in various genres. Over these years, active research has been developed both in Japan and China. "Regret for the Past" which was written in the year 1925, is the only love story by Lu Xun. Until it was included in his second novel collection "Wandering", it had been an unpublished work. This love story was written on the 21th of Oct. in 1925, just four days after the completion of "Lonely Person". That year and previous year were the most creative and fruitful time for Lu Xun, most of the writing of "Wild Grass" and "Wandering" was done. Of these works, especially "Regret for the Past" continues to be special to readers. It has been attempted to plumb the works for autobiographical details about the author himself. At the same time, it has been discussed for many of its peculiarities and symbolism in the work.

In regards to the work of Lu Xun, there are a number of literary studies about his prose and syntax. In this paper, we focus on the metaphors, similes, and metonymies in "Regret for the Past", and analyzing their role, to unravel the relationship between these and the content of the story.

キーワード……比喩表現 類似 喩詞

1. はじめに

魯迅の作品は様々なジャンルにわたってかなり大量に残されており、中国はもとより日本においても活発な研究が展開されている。1925年に書かれた小説「傷逝」は、魯迅が男女の恋愛を描いた唯一の作品であるが、第2小説集『彷徨¹⁾』に収録されるまでは未発表の作品であった。脱稿は1925年10月21日、同じく『彷徨』所収の「孤独者」の完成からわずか4日後のことである。この年およびその前年は魯迅の生涯で最も創作の実りの多い時となり、『彷徨』の作品全てと散文詩『野草』のほとんどが生み出されている。その中でも「傷逝」は魯迅の読者にひときわ気になる存在であり続けてきた。ひとつには魯迅の書いた唯一の「恋愛小説」ということへの注目があろう。作品の背後に作者自身の伝記的事実を探ろうとする試みもなされている。他方で作品自体の内容・表現が持つ特殊性もまた多く論じられてきている。

魯迅の作品については文学的な研究もされているが、文体・文章など語学的な研究も少なくない。とりわけ川本栄三郎から「魯迅の比喩用法の特徴として、主題内容と密接し、同一作品のすべての比喩が緊密な関連を持ちながら、合理的かつ有機的に配置されている……主題内容と密接したところに、すなわち作品の完結性に沿った方向で、少しの無駄や遊びもなく、同一作品のすべての比喩が緊密な連絡を取りながら合理的かつ有機的に配置されている点が挙げられる²⁾」と評され、研究が進められてきた。

本稿では、「傷逝」における直喩、隱喩と換喩という比喩表現に着目する。そして、これらの果たす役割を分析し、内容との関連を解き明かす。

2. 「傷逝」について

「傷逝」は、主人公涓生が、過去一年ほどの生活に起こった出来事を回想し、現在の「悔恨と悲哀」を綴る手記という形式で書かれた小説である。「悔恨と悲哀」の誘因となった出来事はすべて手記を綴る涓生の視点を通してのみ読者に示される。小説では、冒頭と結末が、手記を綴る涓生の現在に連続し、中間に、出来事があった過去が挿入されている。

涓生と子君は自由恋愛をして、吉兆胡同で結婚生活を始めた。当初結婚生活は順調だったものの、涓生が失業してから暗転し始めた。生活が困窮し、涓生が愛の破綻を宣言したため、子君が父親につれ去られた。最後、涓生は吉兆胡同の住処を離れ、以前住んでいた住処会館へ戻って、手記を書いたというのがこの小説のストーリーの概要である。

3. 比喩表現について

比喩表現とは、伝えようとする事物に対して類似した他の事物の属性を借りて伝達する表現であり、本来伝達しようとする事物から他の事物への転換行為が行われる。その結果、比喩表現は事物の直接的な表現とは違って、言語的な違和感や文脈上の意外性をもたらし、受容側の想像力を刺激する効果があると考えられる³⁾。本来の事物から他の事物へと転換する比喩表現を研究することによって、その表現主体の性格や文章の個性の一端を明らかにすることができる。

修辞学では比喩の表現技法等からいくつかのものに分類されている。中村明⁴⁾は12種類に及ぶ分類を行っているが、その代表的なものに直喩と隱喩がある。そのうち直喩は、比喩指標と呼ばれる「ような」「みたいだ」といった比喩であることを明示する語が含まれており、たとえばもの（喩詞）とたとえられるもの（被喩詞）がはっきり区別して掲げられることが特徴であることから、「明喩」とも呼ばれている。隱喩は直喩とは違い、表面上比喩だとわかる形式を隠すところに特徴があり、「暗喩」とも呼ばれる。他には、換喩、提喩等もある。

短編小説「傷逝」にも、先述のように、直喩表現が頻出し、その総量は15ある。約13,000字の小説を四百字詰め原稿用紙平均何枚につき一定の割合で現れるかを調べて計算すると、凡そ2枚につき1例の直喩例が現れたことであるから、使用頻度が高い。

(1) 直喩

アンリ・モリエの『詩学・レトリック辞典』は「直喩」について「文体的事実としては、直喩は一方が他方を喚起することとする二つの事物のあいだに設定された類似性(resemblance)の関係である。」と記述した⁵⁾。

直喩と隠喩はどちらも「類似性」を原理にしているが、類似性の主張が隠喩は比喩指標が無いことに対して、直喩は「のようだ」を介して間接的であるということであろう。しかし、形式的条件(「のよう」なという指標の存在)を満たしていれば直喩になるかは、通常の比較表現の問題と関係する。

比較は、ある対象ともう一つの対象との間にある類似点を見つけ出すプロセスと、差異を見つけるプロセスから始まる。一方比喩は類似性の認識に意外性が認められる点においては単なる比較表現とは違っている。それは差異を認識した上でのことであり、つまり、比喩においては類似点と差異との双方の認識に、類似性に関する意外性が加わって成り立つものである、といえる。しかし表現によって発話の文脈を考慮しないと、比較表現なのか比喩なのかははっきり区別できない場合がある。魯迅の言語感覚は複雑である。彼の比較表現と比喩との使い分けを一つ一つの言語形式に基づき明らかにしていくなかで、魯迅の直喩表現を抽出することにする。

A. 類似表現と直喩

「傷逝」において、類似表現は次のような言語形式を取る⁶⁾。

a. 「似乎」、「仿佛」(～のよう、～そう、～に思える、it seems)による類似

①只是耳朵分外地灵，仿佛听到大门外一切往来的履声，从中便有子君的，

ただ耳だけは敏感で、外の足音がほとんど全部わかるようだった。そのなかに子君の靴音もあって、

②当我指给她看时，她却只草草一看，便低了头，似乎不好意思了。

私が指さしてみせると、彼女はちらっと見ただけで、きまり悪そうに眼を伏せてしまった。

③但也还仿佛记得她脸色变成青白，后来又渐渐转作绯红，

ただし、かすかに覚えているのは、彼女の顔が真っ青になり、それからだんだん赤く変わったこと、

④但是夹着惊疑的光，虽然力避我的视线，张皇地似乎要破窗飞去。

しかも疑惑な目線を伴った。私の視線を避け、そわそわして、いまにも窓を破って飛び出そうとするかのようだった。

⑤不过三星期，我似乎于她已经更加了解，

三週間とたたずに、彼女についての理解をいっそう深めたように思う。

⑥那么一个无畏的子君也变了色，尤其使我痛心；她近来似乎也较为怯弱了。

あれほど恐れ知らずの子君が顔色を変えたのが、とても辛かった。近頃彼女はどうも気が弱くなったようだ。

⑦很觉得疲劳，仿佛近来自己也较为怯弱了

自分でも近頃気が弱くなったのかもしれない。

⑧在无言中，似乎又都感到彼此的坚忍倔强的精神，还看见从新萌芽起来的将来的希望。

無言のうちにお互いの堅忍不拔の精神を感じ、さらに新しい希望の萌え出る将来を見ていたようだった。

⑨子君的功业，仿佛就完全建立在这吃饭中。

子君の功績は全部この食事にたてたようであった。

⑩她似乎将先前所知道的全都忘掉了，也不想到我的构思就常常为了这催促吃饭而打断。

彼女は前に知っていたことをすべて忘れたらしく、私の構想が食事の催促で中断されることに気付かなかった。

⑪只有子君很颓唐，似乎常觉得凄苦和无聊，至于不大愿意开口。

ただ子君は元気がなくなり、いつも寂しそうな、手もちぶさたな様子で、ろくに口もきかなくなりました。

⑫但子君的见识却似乎只是浅薄起来，竟至于连这一点也想不到了。

ところが子君の見識は浅くなったようで、それすら気づかなくなりました。

⑬子君似乎也觉得的，

子君も気がついたらしい、

⑭我觉得着似乎给了我当头一击，

頭に一撃くらったような気がした。

⑮这使我一惊，仿佛得了一点生气。

びっくりして、いくらか元気が出たようだった。

⑯这似乎又不是意料中的事，

まるで予期せぬことのようで、

⑰我似乎被周围所排挤，奔到院子中间。

周囲から押しまくられたように私は中庭に走り出た。

⑱暗中忽然仿佛看见一推食物，

闇に突然、食物の山が見えたような気がして、

⑲死于无爱的人们的眼前的黑暗，我仿佛一一看见，还听得一切苦闷和绝望的挣扎的声音。

愛を失くして死ぬ者の眼前にある暗黒が、私にはつぶさに見えるようだ。苦悶と絶望のあが

きの声が、つぶさに聞こえるようだ。

以上の⑭以外の例文の中に入っている「似乎」と「仿佛」は、比喩表現ではなく作者の推測を表している。対照的に⑭は、慣用熟語の「当头一棒」から派生したものと考えられるので、比喩表現を用いている。

ここでは、「似乎」と「仿佛」は知覚意識動詞と共に用いられ、自ら意識動詞化し、心理描写に使われた。小説の前半では、主に子君の心理を推測する為に使用されているが、後半では、例文⑯から⑰までのように消生自身の意識を表す表現として使用された。「似乎」と「仿佛」の使用はストーリーの悲劇的な結末を予感させるだけではなく、小説全体にも一種の重圧感を与えているのである。

b. 「像」、「如」による類似表現

⑳深夜中独自躺在床上，就如我未曾和子君同居以前一般，

夜中に一人でベッドに横になっていると、子君と同棲する以前にそっくりで、

㉑我憎恶那不像子君鞋声的穿布底鞋的长班的儿子，我憎恶那太像子君鞋声的常常穿着新皮鞋的邻院的搽雪花膏的小东西！

私は、子君の靴の音に似ていない、布靴をはいた下僕の息子が憎かった。子君の靴の音そっくりな、いつも新調の皮靴を履いている、隣のクリームをぬたくった若僧が憎かった。

㉒后来一想到，就使我很愧疚，但在记忆上却偏只有这一点永远遗留，至今还如暗室的孤灯一般，照见我含泪握着她的手，一条腿跪了下去……。

あとで思い出すたびに顔がほてるが、意地わるいことに、それだけがいつまでも記憶に残っていて、今でも暗室の灯りのようにその光景を照らし出す——私が涙をうかべて彼女の手をとり、片膝をついて……

㉓我的举动，就如有一张我所看不见的影片挂在眼下，叙述得如生，很细微，自然连那使我不愿再想的浅薄的电影的一闪。

私のやったことを、まるで私には見えないフィルムが眼前にあるように、如実に事こまかに述べてみせた。むろん私が二度と思い出したくないあの浅薄な映画の一つのシーンをふくめて。

㉔她却是大无畏的，对于这些全不关心，只是镇静地缓缓前行，坦然如入无人之境。

しかし彼女のほうは、なに憚ることなく、まったくの無関心で、ゆっくり歩を運び、さながら無人の境を行くように平然としていた。

㉕但同时也如赫胥黎的论定“人类在宇宙间的位置”一般，自觉了我在这里的位置：不过是叭儿狗和油鸡之间。

そしてハックスリーが「宇宙における人類の位置」を確定したように、ここにおける私の位置は犬と鶏の間にすぎないことに気付いた。

②⑥ 这北京的冬天；就如蜻蜓落在恶作剧的孩子的手里一般，被系着细线，尽情玩弄，虐待，虽然幸而没有送掉性命，结果也还是躺在地上，只争着一个迟早之间。

この北京の冬を、私たちはどうやら越すことはできた。といっても、トンボがいたずらっ子につかまり、細い糸でしばられ、思うさま弄ばれ、虐待されながら辛うじて命だけは助かったようなもの、早いかおそいかは別として、いずれは伸びて地面にころがるのがおちだ。

②⑦ 有时，仿佛看见那生路就像一条灰白的长蛇，自己蜿蜒地向我奔来，我等着，等着，看看临近，但忽然便消失在黑暗里了。

ときには生命の道が灰色の長蛇のように、うねうねとこちらへ向かってくるのが見えるような気がして、じっと待ってみるが、今しも近づいたと思うとたちまち暗黒のなかに消えてしまう。

②⑧ 夜阑人静，是相对温习的时候了，我常是被质问，被考验，并且被命复述当时的言语，然而常须由她补足，由她纠正，像一个丁等的学生。

夜がふけてあたりが静かになると、さし向かいの復習の時間がくる。私はいつも質問され、試験され、おまけにあのときしゃべったことの復誦を命ぜられるが、まるで劣等生のようにしよっちゅう彼女から補足され、訂正される始末だった。

②⑨ 我便轻如行云，漂浮空际，

私は雲のように身が軽くなり、空で漂っている。

③⑩ 子君总不会再来的了，像去年那样。

もう子君は二度と、去年のように訪ねて来なくなったのだ。

③⑪ 这眼光射向四处，正如孩子在饥渴中寻求着慈祥的母亲，但只在空中寻求，恐怖地回避着我的眼。

その眼は子どもが空腹のとき慈母を求めるように周囲に注がれたが、私の眼を恐れて避けていた。

ここでの 11 の文例の中にある②②、②③、②⑥、②⑦、②⑧、②⑨、③①という七つの文例は比喩である。この中で、「如」を使う文は②②「如暗室的孤灯一般」、②③「如有一张我所看不见的影片挂在眼下」、②⑥「如蜻蜓落在恶作剧的孩子的手里一般」、②⑨「我便轻如行云」、③①「如孩子在饥渴中寻求着慈祥的母亲」である。「像」を使用する文例は②⑦「那生路就像一条灰白的长蛇」、②⑧「像一个丁等的学生」である。

「如」は本来比較表現であるから、原理上比較に基づいている類似表現と同じ意味機能を持っている。例えば、「如」を使用した②②「如暗室的孤灯一般」、②③「如有一张我所看不见的影片挂在眼下」、②⑥「如蜻蜓落在恶作剧的孩子的手里一般」、②⑨「我便轻如行云」、③①「如孩子在饥渴中寻求着慈祥的母亲」という五つの例文の中で、「記憶」を「暗室の灯り」や「見えないフィルム」と喩え、「北京の冬」を「トンボ」に喩え、「私」を「雲」に喩え、「子君」を「子ども」と喩え

る。これらの「被喩詞」と「喩詞」の類似点は、形状や外観ではなく、作者の意識を表す内在的な類似点にある。また、「像」を使用した文例、㉗「那生路就像一条灰白的长蛇」と㉘「像一个丁等的学生。」では、「生命の道」を「灰色の長蛇」と喩えることは外観による判断から生じた比喩であり、「私」を「劣等生」と喩えることは、「私」と「子君」の関係性に対する作者の意識から生じた比喩である。

「傷逝」においては、「如」は明らかに「像」より多用されている。「被喩詞」が「喩詞」と比較される中で、比喩表現が生じたと言えるだろう。そこで、「被喩詞」と「喩詞」の比較側面や、「喩詞」に対する考察が必要となる。

c. 「似的」、「一般」による類似

㉒她又带了窗外的半枯的槐树的新叶来，使我看见，还有挂在铁似的老干上的一房一房的紫白的藤花。

窓の外の枯れかけた槐の木から若葉をもいできて私に見せてくれたこともあった。鉄のような古木に下がっているうす紫のひと房も。

㉓孩子似的眼里射出悲喜，

子どものような目から悲しみと喜びがほとばしった。

㉔我拣了一个机会，将这些道理暗示她；她领会似的点头。

機会を見てそれとなく諭してやると、得心したようにうなずいた。

㉕她却是什么都记得：我的言辞，竟至于读熟了一般，能够滔滔背诵；

しかし彼女のほうでは、何もかもよく覚えていた。私の言ったことを、まるで熟読したようににすらすら暗誦して見せた。

㉖但我只要看见她两眼注视空中，出神似的凝想着，

ただ私は、彼女が眼を虚空に向けてうっとりとしたような思いに沈み、

㉗回味那时冲突以后的和解的重生一般的乐趣。

あの衝突のあとの生まれかわりに似た和解の楽しさを味い返すだけだった。

㉘局里的生活，原如鸟贩子手里的禽鸟一般，仅有一点小米维系残生，巨额不会肥胖；

役所の生活は子鳥屋の子鳥同然、わずかの粟で命をつなぐだけで、肥えることは絶対ない。

㉙从此便失掉了她往常的麻木似的镇静，

彼女のいつもの無感覚のような冷静をなくした、

㉚看见她孩子一般的眼色，

彼女の子どものような目線をみて、

㉛她脸色陡然变成灰黄，死了似的；

彼女の顔色は土気色に、死人のようになった。

㉜这之后，便浮出一个子君的灰黄的脸来，睁了孩子气的眼睛，肯托似的看着我。

魯迅「傷逝」の比喩表現について（劉）

そのあと子君の土気色の顔が浮かび、子どものような目で、懇願するように私に向けた。

④⑨有一天，将要出乎意料表地访我，像住在会馆时候似的。

いつの日か、会館のころのように不意に私を訪ねてくるだろう。

④⑩现在她知道，她以后所有的只是她父亲——儿女的债主——烈日一般的严威和旁人的赛过冰霜的冷眼。

いま彼女は、自分に残されたものが、父親——子女の債権者——烈日のような厳しさと、世人の氷にまさる冷たい眼だけであることを知ったのだ。

④⑪长久的枯坐中记起上午在街头所见的葬式，前面是纸人纸马，后面是唱歌一般的哭声。

行列の先頭は張り子の馬、後方は歌をうたうような泣き声だ。

この14例の類似表現の中で、③②「铁似的老干」、③③「孩子似的眼里射出悲喜」、③⑦「和解的重生一般的乐趣」、③⑧「如鸟贩子手里的禽鸟一般」、④⑩「孩子一般的眼色」、④⑪「烈日一般的严威」は比喩表現となる。

また、④⑪「唱歌一般的哭声」では、「唱歌（歌をうたう）」と「哭声（泣き声）」は両方とも身体表現であるため、通常比喩表現と考えにくい。しかし、楽しい感情を表現する「歌をうたう」と、悲しい感情を表現する「泣き声」という言葉は、涓生の人生に皮肉の意味を帯びさせる比喩表現として使用されていると考えられる。

B. 喩詞による意味の限定と拡張

はじめに、次の考察例を見て頂きたい。

局里的生活，原如鸟贩子手里的禽鸟一般，仅有一点小米维系残生，决不会肥胖；日子一久，只落得麻痹了翅子，即使放出笼外，早已不能奋飞。现在总算脱出这牢笼了，我从此要在新的开阔的天空中翱翔，趁我还未忘却了我的翅子的扇动。

役所の生活は子鳥屋の子鳥同然、わずかの粟で命をつなぐだけで、肥えることは絶対ない。日がたつにつれて翼がなえ、たとえ籠から出ても思いきって飛べなくなる。いまともかく籠から抜け出たからには、さっそく私は新しい広大な空に向かって舞い上がらなければならない。わたしの翼がはばたきを忘れぬうちに。

この文章の中で、被喩詞は「局里的生活」であり、喩詞は「鸟贩子手里的禽鸟」である。喩詞と被喩詞だけを取り出して見比べてみても、それぞれの共通点が何かは必ずしも分からない。喩詞「局里的生活（役所の生活）」という表現からは、通常「安定し、社会地位の高い仕事だが単調で拘束された生活」という意味が連想される。これに対して、「鸟贩子手里的禽鸟（子鳥屋の子鳥）」は第一に「囚われの状態」と理解される。この意味では、喩詞と被喩詞の意味は部分

的にしか重ならないが、この二つをつなぐものとして、「わずかの粟で命をつなぐだけで、肥えることは絶対ない。日がたつにつれて翼がなえ、たとえ籠から出ても思いきって飛べなくなる。」という言葉が付加されることによって、共通性が明らかになるとともに、話し手がこの比喻に込めた意味を明確に把握することができる。ただ単に喩詞と被喩詞の関係を明確にしただけでなく、その関係性を拡張し、個人化し、具体化した形で示している。

もう一つ、考察例を挙げてみよう。

这北京的冬天；就如蜻蜓落在恶作剧的孩子的手里一般，被系着细线，尽情玩弄，虐待，虽然幸而没有送掉性命，结果也还是躺在地上，只争着一个迟早之间。

この北京の冬を、私たちはどうやら越すことはできた。といっても、トンボがいたずらっ子につかまり、細い糸でしばられ、思うさま弄ばれ、虐待されながら辛うじて命だけは助かったようなもの、早いかおそいかは別として、いずれは伸びて地面にころがるのがおちだ。

この場合、喩詞は「蜻蜓落在恶作剧的孩子的手里」であり、被喩詞を文中から指摘するとすれば「这北京的冬天」ということになるだろうが、意味的には「冬の北京で過ごした生活」ということになると考えられる。この例も同じように、被喩詞に対応する喩詞とは、一般的な認識において、想像しにくいものである。喩詞に着目して考えると、「蜻蜓落在恶作剧的孩子的手里」の意味は、①自由を失った。②命の危険がある。③虐待される。④無力である。などが連想されるだろう。それを「被系着细线，尽情玩弄，虐待，虽然幸而没有送掉性命，结果也还是躺在地上，只争着一个迟早之间。（細い糸でしばられ、思うさま弄ばれ、虐待されながら辛うじて命だけは助かったようなもの、早いかおそいかは別として、いずれは伸びて地面にころがる。）」という風に、普通は漠然とした類似性しか思いつかないところを、具体的に拡大して想像を膨らませてゆくところに魯迅の比喻表現の特徴がある。このようなかたちで、動物のイメージにより、読者に命や生活について考えさせ、ストーリーの結末を暗示する働きもあると考えられる。

以上の二つの考察例においては、喩詞を細かく限定することによって、イメージをより明確化し、具体化し、膨張させ、かつ深化させ、そこに意外な発見をする効果もあることが分かる。また、喩詞への限定により、喩詞を文脈やストーリーの展開に関わるレベルに引き上げる機能もある。

これまで直喩表現における効果について具体的な考察例を挙げながら述べてきたが、喩詞とはどういう存在であるのか。喩詞は、被喩詞のイメージ喚起及び強調が基本的な働きであること、さらに被喩詞と喩詞の関係性、特に間接性という性質から起るイメージの拡張が比喻表現

の働きの一つとしてある、ということは今まで述べてきた。そこでは被喩詞となる語ありき、という考えが基本にあり、喩詞はその付属的な扱いでしかなかった。しかし、この喩詞によるイメージ喚起、被喩詞と喩詞の関係性の具体化、特に間接性という性質から起るイメージの拡張においては、喩詞も重要視されるべきであろう。

「傷逝」の比喩表現においては、イメージの拡張という働きが補助的な働きではなく、比喩の働きの一つとして確立されていると考えることができる。

直喩表現においては、「小鳥」、「トンボ」、「蛇」等の動物を示す表現がしばしば使用される。実際、「傷逝」の中には、数多くの小動物が登場している。涓生と子君は借家を借り、この借家の家主と共同で使用する小さな庭で、鶏を飼育するようになった。しかし、鶏の飼育を巡って、隣に住む借家の家主の妻とトラブルを起こしてしまう。これにより、借家に住みづらくなってしまふ。また、毎日の食事、鶏、ペットの犬の世話など、子君は殆どすべての家事を忙しくこなしていたことから、涓生は家で寛ぐことが出来なくなった。また家主の妻とのトラブル等の心理的圧迫もあり、借家での生活は、二人の心の距離を開かせることになってしまった。

結局、生活のため鶏を食用にして、ペットの犬も捨てられる運命となった。後半の子君が死んだ場面では、動物についての表現はなかったが、小動物達の運命は子君の今後の運命を暗示していたのである。

ここまでは喩詞を分析することで、魯迅の直喩表現効果のメカニズムの一端に触れることが出来た。まとめると、次の2点に集約される。

a. 修飾語を重ね、細かく喩詞を限定することにより、イメージの拡張の幅を大きく広げる効果をもたらしていること。

b. 被喩詞と喩詞の関係において、喩詞は被喩詞のイメージを喚起・強調するだけでなく、「イメージの拡張」という働きがあることから、喩詞の方が重視されること。

（2）隠喩

隠喩はより抽象的で分かりにくいものをより具体的で分かりやすいもので表現し、このことによって主題を鮮やかに印象的に理解させる表現である。隠喩は「類似性」原理と「意味論的カテゴリ侵犯」（差異性）の原理からなっている。一般に比喩構造には、「喩えられるもの」、「喩えるもの」、この両者を結び付ける「根拠」という三つの要素が考えられるが、隠喩表現では「根拠」が隠されている。根拠を探し当てるのは聞き手、つまり読者の役目である。

以下に「傷逝」で用いられている隠喩を三例挙げる。

①我终于在通俗图书馆里觅得了我的天堂。

とうとう公立図書館にわが天国をさがし当てた。

被喩詞は「図書館」、喩詞は「天堂(天国)」である。

②逼我做出许多虚伪的温存的答案来，将温存示给她，虚伪的草稿便也在自己的心上。我的心渐被这些草稿填满了，常觉得难于呼吸。

やむをえず私は虚偽のいたわりの答案をたくさん作り、いたわりを彼女に示し、虚偽の草稿は自分の心にしまっておいた。この草稿で自分の心が埋まってゆくため、絶えず呼吸困難になった。

②の中の被喩詞は「いたわり」であり、喩詞は「虚偽の草稿」である。この比喩は単に「いたわり」の比喩となるだけではなくて、さらに拡大してナレーターの心理状態（「この草稿で自分の心が埋まってゆくため、絶えず呼吸困難になった」）を表すものとなってゆく。

③冰的针刺着我的灵魂，使我永远苦于麻木的疼痛。

氷の針が私の魂をつき刺し、しびれるような痛みでいつも私を苦しめた。

③の中の被喩詞は明示されていないが、「苦悩」であると考えられる。喩詞は「氷の針」である。

以上の①、②、③の文例において注目すべきは、②の例である。「答案」という喩詞は、この文例においても拡大する傾向を有しているのが見られるが、上述の他の2例の比喩表現においても同じカテゴリーの喩詞が用いられている。

このように同じカテゴリーの喩詞が用いられる文例は、直喩にも現れる。以下の直喩文例を見て見よう。

㉘夜阑人静，是相对温习的时候了，我常是被质问，被考验，并且被命复述当时的言语，然而常须由她补足，由她纠正，像一个丁等的学生。

夜がふけてあたりが静かになると、さし向かいの復習の時間がくる。私はいつも質問され、試験され、おまけにあのときしゃべったことの復誦を命ぜられるが、まるで劣等生のようにしょっちゅう彼女から補足され、訂正される始末だった。

㉙她却是什么都记得:我的言辞，竟至于读熟了一般，能够滔滔背誦；

しかし彼女のほうでは、何もかもよく覚えていた。私の言ったことを、まるで熟誦したようにすらすら暗誦して見せた。

以上の例文㉘と㉙の下線を引いた部分は、「学校での勉強・試験」のカテゴリーに属する喩詞が用いられており、それが、「私」と子君の関係性を表すものとなっているのである。

(3) 換喩

換喩には表現上の効果がある。「属性」で人を呼ぶ場合は、好意的であれ軽蔑的であれ姓名よりその人の特徴を捉えられる。換喩は転義法のなかで、とりわけ「記号性」（代理＝代替機能）を帯びている。例えば、身体－感情の換喩の延長線上に外観（仕種）－内面（心理）の結合性

が考えられる。

① 例是那鲑鱼须的老东西的脸又紧贴在脏的窗玻璃上了，连鼻尖都挤成一个小平面。

いつもあの鯨ひげの老いぼれの顔が、よごれたガラス窓に、鼻先がひしゃげるほどぴったりくっついている。

② 半瓶雪花膏和鼻尖的小平面，于她能算什么东西呢？

半瓶の化粧用クリームとひしゃげた鼻先が、彼女にとって何だというのだ。

③ 那雪花膏便是局长的儿子的赌友，

例のクリームは局長の息子のマーじゃん仲間だ、

①では、「鲑鱼须（鯨髭）」という喩詞が使われている。日本の鯨のイメージでは、鼻下に二本髭を蓄えているだけであるけれど、三本髭の鯨もいる。三本ひげを蓄えた顔は、中国の大人の風貌によく使われ、日本では明治初期に、官吏をあざける場合に使われた言葉である。また、②と③に「雪花膏（クリーム）」という喩詞がある。「雪花膏（クリーム）」を塗る男の外観から、芸者や文人であることが推測できる。これらの人たちが好んで用いる化粧品という「属性」で呼ぶことによって、「私」の彼らに対する軽蔑的な感情が現されている。

他に、何種類の比喩表現が混用される例もある。「傷逝」の最後には次のような記述がある。「现在她知道，她以后所有的只是她父亲——儿女的债主——的烈日一般的严威和旁人的赛过冰霜的冷眼。此外便是虚空。负着虚空的重担，在严威和冷眼中走着所谓人生的路，这是怎么可怕的事啊！而况这路的尽头，又不过是——连墓碑也没有的坟墓。（いま彼女は、自分に残されたものが、父親——子女の債権者——の烈日の厳しさと、世人の氷にまさる冷たい眼だけであることを知ったのだ。あとは空虚だ。空虚の重荷をかついで、厳しさと冷たい眼のただ中を、いわゆる人生の道に踏み込むとは、なんとおそろしいことか！しかもこの道の尽きるところ、わずかに——墓標さえない墓なのだ。）」

子君の悲劇的運命を表すと同時に、涓生の苦痛を描いているこの表現には、三種類の比喩表現が含まれている。

「她父亲——儿女的债主」は隠喩であり、「烈日一般的严威」、「旁人的赛过冰霜的冷眼」は直喩である。また、「这路的尽头，又不过是——连墓碑也没有的坟墓」の中では、「坟墓（お墓）」は人間の死亡を暗示するので、換喩表現である。旧中国の女性は他家に嫁すべき存在であり、生家で死んでもその祖墳に埋められることが出来なかった。子君の遺体は、ほとんど葬式らしい葬式もなく無縁の共同墓地などに葬られ、墓碑も作られなかったであろう。涓生は罪の意識を背負ったまま、彼自身の道を歩き続ける他なかったのである。

（４）喩詞の反復使用

「学校での勉強・試験」の比喩の反復についてはすでに言及したが、他にも、「子供」、「翼」、

「氷」、「道」等の表現は、この作品の中に繰り返し現れ、次第に象徴性を帯びて、単発の比喻より大きなスケールで一種のライトモチーフ役を務めている。

①孩子似的眼里射出悲喜

子どものような目から悲しみと喜びがほとぼしった。

②这眼光射向四处，正如孩子在饥渴中寻求着慈祥的母亲，但只在空中寻求，恐怖地回避着我的眼。

その眼は子どもが空腹のとき慈母を求めるように周囲に注がれたが、私の眼を恐れて避けていた。

③看见她孩子一般的眼色，

彼女の子どものような目線をみて、

④这之后，便浮出一个子君的灰黄的脸来，睁了孩子气的眼睛，肯托似的看着我。

そのあと子君の土気色の顔が浮かび、子どものような目で、懇願するように私を見ていた。このように子君を「子ども」と表現する言葉は頻繁に現れる。しかし、天真爛漫な子どもとしての子君を描くためではなく、不安な子供のイメージを用いることによって、暗い雰囲気と複雑な心境を暗示している。

また、「翼」という表現も何度も使われている。

・局里的生活，原如鸟贩子手里的禽鸟一般，仅有一点小米维系残生，决不会肥胖；日子一久，只落得麻痹了翅子，即使放出笼外，早已不能奋飞。现在总算脱出这牢笼了，我从此要在新的开阔的天空中翱翔，趁我还未忘却了我的翅子的扇动。

役所の生活は子鳥屋の子鳥同然、わずかの粟で命をつなぐだけで、肥えることは絶対ない。日がたつにつれて翼がなえて、たとえ籠から出ても思いきって飛べなくなる。いまともかく籠から抜け出たからには、さっそく私は新しい広大な空に向かって舞い上がらなければならない。わたしの翼がはばたきを忘れぬうちに。

・世界上并非没有为了奋斗者而开的活路；我也还未忘却翅子的扇动，虽然比先前已经颓唐得多……。

この世に奮闘する者のために活路が開かれぬはずはなく、私は翼のはばたきをまだわすれてはいない。以前にくらべてかなり衰えはしたけれども……

・生活的路还很多，我也还没有忘却翅子的扇动。

生きる道はまだまだあるし、自分は翼のはばたきをまだ忘れてはいない、と思う。

これらの比喻によって、語り手は、「小鳥」を連想させ、現実の中における涓生の状況及び無力さを描いている。また、力が弱いため、厳しい現実を変える力がないことからくる悲劇的なストーリーを暗示している。

4. おわりに

本稿では、魯迅の比喩表現、特に直喩表現の具体的な例を挙げて考察し、そしてそのメカニズムの一端を掴んだ。「傷逝」において、直喩の喩詞はイメージの幅を広げる効果を与えている。隠喩においては、同じカテゴリーに属する喩詞が多く用いられることにより、登場人物の関係や、主題を鮮やかに印象的に理解させる役目がある。さらに、比喩の反復はこの作品の中に繰り返し現れ、次第に象徴性を帯びて、単発の比喩より大きなスケールで一種のモチーフ役を務めている。本稿は喩詞について言及し、「傷逝」における比喩表現を分析したが、今後、比喩詞や比喩指標及び、各作品の比喩表現の関連から分析する必要がある。

魯迅の言語表現は極めて複雑である。今後、他の比喩表現及び修辞法に研究の視野を拡大し、魯迅の文章技法を探ってゆきたい。

<注>

- 1) 1926年8月、北新書局初版。
- 2) 川本栄三郎「魯迅の比喩表現—その文体論的アプローチ」『集刊東洋學』、1980、43、pp.70-82。
- 3) 橋本仲美「比喩の表現論的性格と『文体論』への応用(1)」『国文学』、1969、14巻11号。
- 4) 中村明『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所、1977、pp.32-36。
- 5) 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会、1998、pp.181-182。
- 6) 本稿で引用した中国語例文は人民文学出版社の2005年版『魯迅全集』からである。日本語訳文は竹内好の『魯迅文集』（筑摩書房、1978）を参考にし、筆者の訳も加えたものである。

主指導教員（佐々木充教授）、副指導教員（橋谷英子教授・猪俣賢司准教授）